

飛耳長目

通巻187号 令和元年6月1日発行

一「開頭」第73号巻頭言

森 信三

戦後特に独立以来、時々「救国」という言葉に出くわすが、私はあまりこの言葉を好まない。それはひとりて国を救うなどということは、よほどの優れた人ではない限り不可能であり、特に全てが組織によるでなければ、不可能になりつつある現代においてそうである。ある意味でこの言葉に該当するかと思われる人が、私の知る限りにおいて一人二人あるが、それについてはそのうち紹介の筆を取るつもりである。

ところがささやかな私ごとき人間のしている事に対してさえ、時にこの言葉を使われる人に出くわすが、たとい単なる辞礼だとしても、相去ること千里である。だが今夏比叡山における夏安居の感想中、「先生の悲願の一端が分かりだした感がする云々」という文字に出逢って、敗戦以来今日まで持ち続けてきたもの、いや、最近になっていよいよ深まりつつあるものが、考えようによつては、悲願というものでもあろうかと、我ながら初めて考えさせられた次第である。だがこうは言っても、その内容たるや、別に新しいものではなく、「国民教育の真の確立」ということの外にない。もしこれをしも

悲願というべくんば、私もまた「悲願を持つ者」の一人となったと言うべきかもしれない。
〔「開頭」昭和28年9月発行通巻73号 九月号〕

二 何ゆえ「整風文献」を選んだか

夏安居げあんごにおける序説

森 信三

一 講本の決定が遅れて、皆さんに大変ご迷惑をおかけしたことを恐縮しています。実は戦後になって以来、読書会で講本

を決めるのが大変難しくなってきたのであります。あるいはこうした感じは私だけかもしれない。他の人々とこうした問題について話し合ったこともありませんで、他の人々がこの点をどう考えていられるか、存じませんが、少なくとも私にとっては、この感が深いのです。そのため読書会の相談を受けましても、時間の点からよりも、むしろ講本問題の方が厄介で、そのためにもう一つ積極的になれぬという場合が、少なくないのです。そうしてこうした事は、戦前には全く感じなかった事柄であります。ではこれは一体どういうわけでしょうか。

ネット 森信三先生と修身教授録 と検索

これを一言で申せば、「一切の書籍の相対化」ということであります。これを、もう少し具体的に申せば、マルキシズムの出現以前には、絶対的と考えられていた書物の意義が、全てその絶対的意義を喪失してきたということであります。例えば試みにキリスト教の聖書をとってみましょう。すると聖書というものはマルキシズムの出現以前には、何人もその絶対性を疑った者はないのでありまして、仮にであったとしてもそれは特殊な一部の学者に限られていたのであります。

飛耳長目（ひじちようもく） 通巻187号 令和1年6月1日発行

しかるにひとたびマルキシズムが現れ、特にその地上の実現としてのソ連邦および中国が出現しますと、聖書の教えさえも絶対的ではないということ、人々が感じ始めてくる……これを他の言葉で申せば、「聖書でさえ絶対的とのみ言えない一面のあることを、人々が気づき初めてきた」ということであります。換言すれば、聖書の教訓は「愛」の教えであるに對して、マルキシズムは不正に對する「憎」を力説するものだからであります。このことは中共についても言えることでありまして、なるほど中共の文献の中には時に孔子の言葉を引いている場合もないではありませんが、しかし全体の調

子としては孔子的な考えを、根底から一度裏返して見る立場であると言えるでありましょう。つまり一言にして言えば孔子教に對しての批判である。今手元に文献を持っていませんので、いちいちその証拠をあげることにはできませんが、しかし中共の文献全体を貫くものは、マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンを貫通してきたいわゆるマルキシズムであつて、それはマルキシズムが西欧において、キリスト教に對する批判的プロテストであるのと全く同様であります。

このようにして、聖書とか論語とか言われるものは、これまで人類の聖典として、全く何人もこれに對して批評がましい態度をとる事は許されないものとしてタブー視せられてきたのに對して、今やこれに對して公然たる批判のプロテストが見られるようになってきたのであります。

ところでわが国においては今回の敗戦によつて、これまで絶対視せられてきた国体觀念の崩壊とともに、初めてこのような根本批判の立場が現実的に受け入れられ出したのであります。でありますから、もし敗戦という最大の悲劇的な出来事がなかつたとしたら、一切の典籍の「相対化」ということも、またこれほどに深

刻な現実感を持つて受け取られるには至らなかつたかもしれませぬ。

このような事情によつてこれまで読書会においてテキストを選ぶのに、何ら困難を感じなかつた私たちなのに、如何なる書物も相対的な感じがして、一体どれを選ぶべきかに迷うのであります。しかもこのことは畢竟人類の歴史が今やテレーの時代からアンチテレーの時代に移行しかけている証拠と思われるのであります。

3

そこで次に問題となることは、「それはアンチテレーの時代を導き入れんとしつつあるマルキシズムの書物を選んだらどうか」ということが問題となるわけでありませぬ。

ところがこの点に関しては、マルキシズム自身が批判の立場、プロテストの立場に立つ者として、それ自身相対性を示現しているということでありませぬ。それゆえ今や人類は論語や聖書が相対化したからといつて、それらを投げうつて、「資本論」以下マルキシズム関係の文献のみが、人類の絶対的典籍に化したとは言えないのであります。一面からは確かにそうした断言を迫るものがありながら、他

の一面どうしてもそうだとはい切れないものもあることを、人類の本能感覚は、我われに感受せしめるのであります。ではこれは一体どういうわけでしょうか。

聖書や論語が相対化したと言いながら、しかも「資本論」を以てこれらのすべてと取り代えると言うことのできかねるもののあるのはなぜでしょう。それは聖書や論語は人類文化のテーゼの時代の自覚的始源を示す代表的典籍として、時代的には相対化したけれども、本質的にはなおその絶対性を保持している。これに反してマルキシズムの諸典籍は人類のアンチテーゼの時代を導くものとして、時代的には絶対化したとまでは言えない。故を以て本質的に絶対化したとは言えない……と言えらるべきであります。今以上に述べたことがらを要約的に申しますとすれば、聖書の精神を最も端的に表すことばが「汝の敵を愛せよ」と言う言葉であるとするれば、マルキシズムの精神を現すものは、不正なる「汝の敵を憎め」という言葉であることによっても分明であると言えましよう。

かくして以上述べてきたことを一言で言えば、「マルキシズムの出現によって、マルキシズムをも含めた一切の書物が相対化した」ということであります。

人によつてはこのような言葉によつて、何となく頼りなくなりがちになり、がっかりした感じを抱く人もあろうかと思ひますが、実はこれによつて初めて人類は真の自由の一步を踏み出したと言つて良いであります。すなわちこの地上ではいかなるものも「絶対的絶対」なものはありません、いかに絶対的だといつても、それが地上的存在である限り、すべては「相対的絶対」たるに過ぎないというところが、書物文献の上にも初めて明らかになり出したことを意味するからであります。

4

そこで問題は、では一体どういうわけかで今回のテキストにこの「整風文献」を選んだかということになります。それは第一には時代の趨勢からして、どうしてもマルキシズム関係の文献から選ぶたいと思つたということ、そして第二にはマルキシズムの文献中から選ぶとすれば、結局中共の文献から……と考へたと申すことでもあります。このうち第一の方は説明せずともわかっていただけかと思ひますが、マルキシズムの文献というものは、人にもよりましようが、一般的にはなかなか入りにくいものであります。

特に本誌の誌友諸氏には、そうした人が多いのではないかと考えられるにつけても、それだけ今日の時代においては、何か一つ入門の手引きになる良書を選んで購読してみたら……と考へたのであります。

ところがこの第二の点、すなわちマルキシズムへの入門を中共の文献によるうとした事は、順次これから本文を購読していくことによつて、おわかりになると思ひますが、一般に中共の文献と言うものは、マルクス・エンゲルスはもとよりのこと、レーニン・スターリンのものに比べてみても、格段にわかりやすいのであります。

この点は今後いろいろな意味で非常に重大な問題だと思ふんですが、とにかく中共の文献は読みやすく、しかもわかりやすいのであります。そしてこのことは特に毛沢東の文献について言えると思ひます。レーニンやスターリンのものを読んでおきますと、秋霜烈日、まるで牢獄のごとき峻厳さが感じられるに對して、毛沢東のものを読んでいますと、ほんわりと暖かく、まるで早春の土の暖かさも似たものが感じられるのであります。それがいかなる理由によるかというような点は、順次本文の講読によつて説明し

てまいります。とにかく中共の文献は、同じくマルキシズムを背骨とすると言いつながら、レーニンやスターリンの文献とはその調子の上で必要な違いがあるのであります。

実は始め毛沢東の「実践論」にしようか、それともこの「整風文献」にしようかとずいぶん長い間迷ったあげく、最後にこの本をとったのですが、それは「実践論」以上にこの方が分かりやすく汁気が多いからであります。

5

かくして私が今回の夏安居のテキストとしてこの書を選んだのは、大体以上のような考えからして、第一にこれによって我々が現在当面しつつある世界史の現段階の意義を明らかにしたいということ、第二には隣邦中国の未曾有の大変革を導きつつある指導理念がいかなるものであるかを知る事。第三にはそれからして中国とわが国との現実的諸条件の共通点と相違点を比較対照することにより、今後わが民族の行くべき方向を見出したいということでありませう。

これらの点からして、私として今日ほぼ確定的に言い得る事は、今日我らの民族にとってファイフテの「ドイツ国民に告

ぐ」に代わるべき書物はまさにこの「整風文献」だということでありませう。すなわち端的に言って今や我々はファイフテの「ドイツ国民に告ぐ」を投げうって、毛沢東のこの「整風文献」と取り替えねばならぬということでありませう。この言葉は意外と思われる方も多いかと思ひますが、それはファイフテの生きていた時代および彼の置かれた国家の環境よりも毛沢東のそれの方が、はるかに我々の今日の現実に近似しているからであります。

最後にもう一つ。それはこの「整風文献」は中共革命を成就せしめた偉大な実現建設の真理でありますから、したがってそれはまた見方を変えれば、現在我々の当面している「国民教育の再建」に対しても、そこに多大の示唆と暗示とが含まれているという点であります。もちろんこの書自身は一応政治的建設の立場で説かれていたのであるが、しかし我々としては同時にそれを「教育再建の真理」として、転読し活訳して行かなければならぬと思うのであります。マルキシズムに関しては全くズブの素人に過ぎない私が、この書を講読するにあたって、もし多少なりともそこに取り得があるとしたら、この一点位のものでありませう。(昭和28年9月5日発行「開頭」第73号9月号)

【注】夏安居(げあんご)は一定期間、外出せずに、寺にこもって修行します。

■安居は、雨から生まれた言葉で、雨期を意味します。

■夏安居げあんご、夏行げきょう、夏籠り、夏勤め、坐夏さげ、坐臘さろう、などとも呼ばれます。

■いわば安居は夏の講習会。安居会あんごえとも呼ばれます。

あとがきに替えて

毛沢東著の「整風文献」は若い頃手にした記憶はあるが、生来の食わず嫌いがページを最後までめくらせるには至らなかった。小生は共産党嫌いであつたし今もそうである。森信三先生は時代の変化に敏感で時代に即した書物を追っておられたようだ。他を導く立場にある人は、右も左も知った上での発言が求められる。小生は森信三先生をはじめ、そんな知らない世界を知っている人の言動を観て、自己の考えを決める、そういうずるい人間である。小生にとってマルキシズムなどアヘンの存在であつた。(31日二繁)

〒633-0003

桜井市朝倉台東2-538-89

電話0744-4513422

臂 繁二

Email:hij3@ken.jp

http://web1.ken.jp/syushn